

カント研究に基礎づけられた ヴェブレンの人間本性論

新井田 智幸

はじめに

アメリカの思想家であるヴェブレン (Thorstein Veblen, 1857-1929) は、多方面で独特の思想を展開し、様々な学問に影響を与えた人物であるが、特に制度派経済学の創始者と経済学史上は位置づけられている。経済現象を、合理的な行動の論理からだけでなく、歴史的な経験の記述だけからでもなく、「制度」の分析によって捉えるという、彼が切り開いた着眼点は、当時の主流派経済学批判を伴って、20世紀初頭のアメリカにおける経済思想の新たな潮流を作り出すこととなった。ヴェブレンから影響を受けた後続の経済学者は、数々の制度的経済理論を生み出し、制度派経済学という学派のまとまりとして捉えられるようになった。その意味で、経済学史上のヴェブレンのインパクトは十分に大きいといえるだろう。

しかし、制度派経済学がいわゆる学派と呼べるほどに共通のディシプリンを共有しているかという点、それは大いに疑わしい。そもそも、創始者とされるヴェブレン自身が明確な理論体系を残したとは言い難く、後世のヴェブレン研究においても、その体系性をめぐって意見の一致はみられていない状況であるから、ヴェブレンを基軸とするディシプリンは成り立ちえないともいえる。結局、制度派の数々の理論の共通点は、主流派とは異なる方法論を用いて、制度に着目した分析を志向するといった点にとどまっているといえてよい。

結果的に生み出されてきた数々の制度理論は、何らかの点でヴェブレンを引き継ぎながら、関心に応じて分散し、多様化していった。ここで、ヴェブレンの理論から積極的に引き継がれたものとそうでないものとの差が浮かび上がる。より積極的に引き継がれたのは、制度の進化の概念や、古典的な資本主義経済とは異なる大企業体制や大衆消費社会としての現状認識などがあげられよう。他方であまり引き継がれていないものに、ヴェブレンが制度理論と一体的に展開した人間本性論があげられる。ヴェブレンの制度理論は、思考習慣としての制度が行動を規定するという側面だけでなく、その制度の起源となる要素や、人間の本源的な行動力や行動の指向性について、人間本性に言及しながら論じる内容も含んでいる。その代表的なものが、本能として提示されている、製作本能や親性性向や好奇心であり、他にも張り合いの性質といった理論上重要な役割を果たす人間本性も登場する。こうした人間本性論は、一見して経済学の範囲を超えているうえに、生物学や心理学の知見に照らしても根拠が

薄弱であると考えられたために、あまり評価されず、後の制度派経済学者に継承されることが少なかったといえる¹⁾。しかし、ヴェブレンの理論体系を理解するには、基礎にある人間本性論をふまえることは不可欠であるし、その理論の形成過程をたどるには、こうした人間本性理解がどのようになされたのかを追うことが有意義であろう。

この課題に取り組むに当たって、本稿はヴェブレンの最初期の論文である「カントの判断力批判」(1884)を検討する。ヴェブレンは研究生生活を始めた当初は哲学を専攻しており、イエール大学での博士号も哲学論文によって取得している²⁾。後に経済学研究を本格化させると、こうした哲学研究は発表されなくなるが、それは哲学と経済学の断絶を示すものではない。この論文とヴェブレンの経済学とのつながりについては、積極的な意義が先行研究でも認められている。例えば、中山(1974)は、ヴェブレンの思想の哲学的基礎を研究するに当たってこの論文を重視し、当時のアメリカの思想状況の中でヴェブレンがカント研究を行った意義を指摘した。そこでは、当時主流の哲学であった常識哲学を批判することで、神学的な色彩の強かった学問状況から脱却を図るための足掛かりとなっていたこと³⁾や、後の進化論的経済学の方法論につながる科学方法論⁴⁾が提示されていることなどが指摘されている。

また、近年では石田(2014)が、ヴェブレンのカント研究と後の経済学方法論とのつながりを詳細に検討している。ここではヴェブレンとカントの異同が整理されたうえで、ヴェブレンがカント研究から導いた独特の見解に、後の経済学方法論で展開した内容が現れていることが指摘される。それは後述するように、帰納か演繹かという方法論争の二項対立を乗り越える帰納的推論の概念であり、進化論的方法につながる目的論批判であり、人間本性の目的論的傾向を認めることなどである。本稿の関心に照らして、最後の人間本性の目的論的傾向について述べておきたい。ヴェブレンは進化論的方法として、自然神学的な目的論的世界観を退けているが、これは世界の法則性が目的論的な究極の真理の現れとなっているとは捉えないということであって、人間が行動する際に目的論的に活動することを否定するものではない。むしろ、人間は本質的に目的論であることはヴェブレンが繰り返し述べており、それは肯定的に把握されている。ヴェブレンの本能論はまさに人間の行動に目的を与える源泉を示しているのであって、人間は単に環境に対して受動的に行動するのではなく、目的をもって能動的に行動する存在だと強調されている。石田はこうしたヴェブレンの人間像が、カント研究を通じた人間の認識能力における目的論的傾向に淵源をもち、発展させられた考えだと論じている。(石田(2014) 62-64頁)

人間行動の目的論的性格の重要性については、本稿においても同様の理解であるが、人間の認識能力の性格と、行動の原動力とを、目的論という言葉の共通性だけで連続的に捉えてよいのかは疑問が残る。確かにヴェブレンは本能を行動の原動力と位置づけながらも、好奇心の本能については、一貫した世界観を追求する性質だと論じる場面もあり、また、製作本

能についても、効率を追求するといった性質の他、その「自己汚染」によって効率性を損なうような目的論的な世界観を形成するはたらきについて長々と論じるなど、人間の認識能力に関わる議論をしていることも事実である。しかしながら、認識能力と行動の原動力とが判別できないほど混在しているわけではなく、両者を区別したうえで、人間本性の各側面をヴェブレンがどう考えたのかを論じることは可能だと考える。したがって、本稿ではカント研究で示されたヴェブレンの探求の理論や認識論が、人間の認識能力に関するヴェブレンの人間観にどのようにつながっているかを検討したい。

以下、第1節では、ヴェブレンの「カントの判断力批判」の内容を紹介し、その特徴を整理する。第2節では、そこで示されたヴェブレンの認識論が、後の人間本性論のなかにどのように現れているかを論じる。以上をふまえて、ヴェブレンが言葉遣いを変容させながらも、人間の認識能力について一貫した議論をしつづけていたことを示したい。

1. ヴェブレンによるカント『判断力批判』の解釈

1-1 カント『判断力批判』の概要

カントの『判断力批判』（1790）は、周知のように、『純粹理性批判』、『実践理性批判』に続く第三批判として書かれた、カント哲学体系の一角を占める著作である。本書で扱われる「判断力」は、カント自身が述べるように、『純粹理性批判』が扱った「悟性」と『実践理性批判』が扱った「理性」との中間項をなす。「悟性」は自然に対する理論的認識をアприオリに可能にする能力であり、「理性」は欲求能力に対するアприオリな認識を可能にすることで道德の形式を導きだす能力である。「悟性」が「人間は何を知りうるか」を基礎づける認識能力であるのに対し、「理性」は「人間は何を為すべきか」を基礎づける認識能力だということである。両者は自然と道德というまったく性質の異なるものを対象にする別種の認識能力といえるが、カントは両者をつなぐ中間項として「判断力」を加えることで、人間の認識能力がこれら三つの結合によって統一的に機能していると論じた。これはカントが認識能力の中でも実践理性を優位のものととらえ、道德の法則が自然において実現しなくてはならないと考えたことによる体系化といえる⁵⁾。自然界は機械的因果関係で成り立っており、悟性はそれを認識できるだけである。しかし、道德は善を追求するものであって、理性は道德法則や義務を認識する。人間が欲望に捕われずに、その道德法則を理解し義務の意識にしたがって、善の追求に生きることが、カントにとっての人間の自由の概念である。このように善に対して目的論的に生きることが、人間の認識能力がもたらす至高の性質だと考えたカントは、自然の対象に対して人間は悟性によって機械論的な因果関係を認識するだけでなく、自然現象のなかに目的論的な性質を読み取る認識能力をももっていると考えた。それを示すことで、理性と悟性の隔絶をつなぎ、道德から自然の認識までを統一的な認識能力の下に体

カント研究に基礎づけられたヴェブレンの人間本性論

系化したのが、『判断力批判』であった。

「判断力」をカントはこう定義する。

「判断力一般は、特殊を普遍のもとに含まれているものとして考える能力である。もし普遍（規則、原理、法則）が与えられていれば、判断力は特殊をこの普遍のもとに包摂する、そしてこの場合の判断力は…規定的判断力である。しかし特殊だけが与えられていて、判断力がこの特殊に対して普遍を見出だすということになると、この場合の判断力は単なる反省的判断力である。」(Kant (1790) s.XXVI, 訳 36 頁)

ここには2種類の「判断力」が示されているが、規定的判断力は悟性が与えた普遍的先験的法則にしたがって、特殊具体的なものを当てはめていく能力であるから、『純粹理性批判』で扱われた認識能力を超えるものではない。他方で、反省的判断力は特殊なものだけをもとにして、その相互の連関を探り、統一を求め、普遍的法則を見つけ出そうとする能力である。この能力こそが、観察対象に目的論的な性質を読み取るものとなる。「判断力」は美や崇高などを認識する能力であるとされるが、人間が観察対象にそれを認めるのは、そこに合目的性が見出せるためであるという。すなわち、観察対象から受ける感覚が、悟性の与える形式に適っているときに、すなわち合目的性が認められるときに、美的快感が起るるのである。このように、美醜を判断するのは、美的快感という感情であるのだが、そこには悟性の与える先験的な概念や原則との適合という基準があるため、美的判断の法則性が認められることになる（美学的判断力）。このような反省的判断力の作用は、有機体や自然全体のなかに目的論的な原理を見出さずにはいられない（目的論的判断力）。有機体の部分は全体のために目的をもって作られたように見え、自然の一部は全体のために目的をもって作られたように見える。これは悟性を通じた自然の理解では許されない臆断であるが、人間は反省的判断力をももち合わせているため、そのような自然観をもってしまうのである。だが、このことが、カントの哲学体系に積極的な意味をもたらす。自然が目的論的に存在すると人間が認識するときに、その最終目的は文化、すなわち、人間性の陶冶にあるとされる。つまり、自然は人間がより高度に発達するために存在しているという認識が成立するのである。ここに来て、理性が対象とする道徳と悟性が対象とする自然は判断力の介在によって接合することになる。理性は道徳の原理を導き、善の追求を人間に求めるが、その人間を鍛え上げるために自然が存在し、道徳を実現させるための手段となるのである。このように、道徳を究極的な人間の目標とした体系として『判断力批判』が位置づけられるのが、カントの3批判の構造であった。

1-2 ヴェブレン「カントの判断力批判」の概要

この『判断力批判』の意義を論じたのが、ヴェブレンの「カントの判断力批判」である。ヴェブレンはまず、カントにならって判断力批判が純粹理性批判と実践理性批判との中間にあるという位置づけを確認したうえで、カントは「自由の現実性のためには両者の本質的差異が不可欠であることを理解する一方で、自由な行動のためには両者の媒介が不可欠であることも理解していた」(Veblen (1884) p.175) と述べ、道徳が自由な存在である人間の行為として追求されることに究極的な目標を見出したカントの哲学体系を確認している。ここからヴェブレンは、その自由の現実性のためには、何が必要とされるかを問う。「自由な人間は事物の因果性を行使できねばならず、さもなければ彼の自由とは不条理に過ぎないだろう」(ibid. p.176)。ここで述べられているのは、人間が行動の結果を予測して行動することで、自らが因果性の原因となり、対象に影響を与えていくことが、自由が現実性をもつための条件であるということである。ここからヴェブレンは、人間がどのようにして因果性の法則を獲得し、行動の結果を予測できるようになるのかということが、カントが『判断力批判』で導いた知見だとして、その意義を独特な視点で評価する。

結果の予測は単なる経験からは得られないとヴェブレンは述べる。「経験はせいぜい何であるか、何であったかを与えるのみで、何になるかをいうことはできない」(ibid. p.176)。そこで「経験が役立ち、道徳が夢で終わらないためには、判断力が登場しなければならない。判断力の力、すなわち推論の力は、理論的知識と道徳的行為を媒介しなければならない。そこで求められる判断力の種類は、帰納的推論である」(ibid. p.176)。このように、ヴェブレンは『判断力批判』の最重要部分は、カントは用いていない言葉である「帰納的推論」にあると論じたのである。「帰納的推論」はカントの言葉では「反省的判断力」に相応する⁶⁾。その機能としてヴェブレンは「単純な経験のデータを超え、経験的知覚では与えられない普遍を探す」(ibid. p.178) ことなどをあげ、経験では得られない、結果を予測する力の源泉であることが繰り返し述べられている。

反省的判断力が特殊から普遍を見出すことは、言い換えれば、「多様性の中に統一性を見つける、または多様性に統一性を与える」(ibid. p.179) ことである。そして、そのためのアприオリな知性の原理は、「事物を知的秩序に還元することに他ならず、それはつまり、事物が悟性の法則にしたがって作られたかのように考えること、事物が知的原因によって作られたかのように考えること」(ibid. p.180) であると説明される。言い換えると、「反省的判断力の原理は、主として、我々の知識能力の活動法則に対象の側が適応することの要求である」(ibid. pp.180-181) とまとめられる。このことをヴェブレンは「適応の原理」(principle of adaptation) と呼んでいる。ここは、カントが、対象に合目的性を見出す能力として反省的判断力を論じていたことをなぞっているといえるだろう。

続いて、この適応の要求が意味することが述べられる。「知識の対象がそれに用いられる

知能の自由な活動の承認であると知性が見出したとき、努力した目的の達成でいつも感じられるような満足感を結果する」(ibid. p.181)。つまり、外的対象が思考によって構想されたものに沿うことが「要求」されており、それが達成されたかどうかは、満足感の大小として現れるということである。これはカントが、判断力を快不快の感情に関わる能力だと論じていることそのものである。

そして、このような対象の知能への適応は二つの異なった方法、段階で行われる。カントが美学的判断力と目的論的判断力とに区別したものがそれである。ヴェブレンもこれを順に説明するが、まず美学的判断力は、「与えられた概念が、認知機能の正常な作用にどれだけ適合しているか」(ibid. p.182)だけが問題となり、概念の客観的妥当性はまったく考慮されないという、完全に主観的な適応の要求である。それに対して、目的論的判断力は「感知するデータがもはや単純なものではなく、実在の知識の一部を構成している」段階において、「それらの適応は、(経験的知識や自然法則の要素の)相互の概念の論理的関係、および知能の正常作用へのそれらの適合のなかに見出される」(ibid. p.183)ものと説明される。ここでは他の概念と無関係に主観的な適応のみで要求の充足が測られる美学的判断力とは異なり、他の概念との論理的整合性が要求されるということである。しかし、カントも論じているように、この場合にも、実際に対象の側にその論理的関係の通りの結びつきが実在すると考えてはならない。「そのような世界の実在の認識、すなわち事物は有機的全体に統一されているという認識は、全体の一部を構成する特殊な事物が、我々の思考が普遍の下に特殊を包摂する論理的法則に類似した特徴の法則に従っているという前提のうえのみ展開されうる」(ibid. pp.184-185)のであって、論理整合的な世界観は人間の認識能力によって作り出されているに過ぎない。こうして、美学的判断力だけでなく、目的論的判断力についても究極的には客観的な知識に基づいた普遍の認識を与えるものではないということ、ヴェブレンはカントにしたがって確認している。そしてこの議論をヴェブレンは受け入れ、「我々が世界の目的論的認識に固執することから証明されるのは、我々の知性の構造がその認識を要求するという事、つまり、知能は、正常作用において、そこに到達するまでは停止点を見出せないということである」(ibid. p.186)と述べる。人間は、事物がなぜそのような性質をもっていることを、ヴェブレンはカントの議論にしたがって認めている。

しかし、ここからヴェブレンの独特なカント批判が始まる。曰く、「目的論の問題は最重要だとはいえ、与えられた事物の目的論的な目標についての知識や、世界の摂理(economy)の観点から考察された行動や出来事の目的についての知識は、人間の生活のためには、また道徳的生活の高度な発展のためにすら、絶対的に必要だとはいえない」(ibid. p.187)。カントにおいては、人間の目的論的認識は、自然全体が有機的に統一し、それが人間の道徳の完成という究極的な目的に適うものとなるとされることで、実践理性を中心とした哲学体

系に位置づけられていたのだった。しかし、ヴェブレンはそのように目的論的な認識が究極目的にまで到達する必要はなく、反省的判断力もそこまでの適応を要求しないと論じたのである。

ヴェブレンの積極説は、「反省的判断力の論理的使用の原理が、適応の一般的原理であることが見いだされた」(ibid. p.187) というものである。そして「その論理的使用によって、判断力は現実に対処しなければならないため、反省的判断力を統制するその原理は、客観的適応の原理となる」(ibid. p.187) と述べる。先ほどまで、目的論的判断力も究極的には主観的な認識しかもたらさないことを認めていたヴェブレンであるが、ここでその判断力が要求する目的論的な認識を限定されたものとし、判断力が究極目的に向かう性質ではなく、論理的に使用される性質を本質と認めることによって、反省的判断力は逆に客観的な知識を与えるものとして解釈されることとなったのである。

客観的知識を与える原理とは何か。それをヴェブレンは、「経験を与えるものを超えた指導原理」(ibid. p.189) と呼んでおり、反省的判断力の「適応の原理」こそがそれを与えるとして述べる。「適応の原理とは、知能の正常な作用のためには、事物は互いに体系的全体性を形作るように認識されざるをえず(事物は有機的全体をなすように調和的に作用すると認識されざるをえず)、精神は現実の知識をそれ自身の正常な作用に適合させようとするというものである」(ibid. p.189)。そして、「適応の原理が我々に与えるものは、第一に我々を推測させることであり、我々の推測を導くことである」(ibid. p.189) と述べる。ここで示されているのは、反省的判断力によって、人間は事物の体系的全体性を求めて、推測を行う性質があるということである。

もっとも、推測だけでは客観的知識は確立しないし、それが求める体系的全体性も実在に対応しているとは限らない。その限界性についてヴェブレンはカントを踏み越えてはいない。しかし、「(適応の原理) ができることのすべては与えられたデータについての推測を導くことであり、その推測が信用に足るか足らないかは経験に任される」(ibid. pp.189-190) との記述にあるように、適応の原理が導いた仮説が経験によって検証されることで、客観的知識としての信頼度を確立していくという展開が付け加わることで、反省的判断力は客観的知識を与える原理となるのである。ヴェブレンは『判断力批判』の最も重要な指摘は帰納的推論であると述べていたが、反省的判断力をこのように仮説形成能力として解釈したことから、そのような評価がなされたのである⁷⁾。

以上より、ヴェブレンが解釈した反省的判断力の機能は、次のように整理できる。反省的判断力は、究極的な目的論にまでは向かわないとしても、事物に体系や秩序を求める人間の認識能力である。美学的判断力については、それは完全に主観的な範囲で完結するが、生活をするうえで身の回りの世界と関わる時には、その体系や秩序の認識は客観的な知識とならなければならない。それをもたらすのが反省的判断力の論理的使用である。これによって

カント研究に基礎づけられたヴェブレンの人間本性論

もたらされる知識は確実な妥当性をもつものではないが、経験に照らして検証されることで、蓋然性を高めることはでき、それが将来の予測を可能にする実践的な知識となる。このような性質から、反省的判断力は帰納的推論と同一視され、カントが発見した人間の重要な認識能力の一つとしての価値が認められる。

ヴェブレンのカント解釈の特徴をその独特な視点について再確認すると、まず判断力を推論の能力と読み替えたことがあげられる。そして反省的判断力は帰納的推論と読み替えられ、経験を越えた知識を創造する唯一の能力として評価された。また、カントが目的論的判断力の作用として論じた自然総体の合目的性の認識への指向性を否定し、その判断力が用いる論理的思考の方に大きな意義を認めた。身の回りの事物について論理的に体系だった考察がなされることで、客観的な知識を、蓋然的であってももたらすことができることこそ、この認識能力の最重要点であると主張されたのである。実はヴェブレンは目的論的判断力というカントの言葉を使わずに、その内容を記述していたのだが、それは目的論的思考を行う能力ではなく、論理的思考を行う能力こそが重要であるとの解釈ゆえであろう。これは忠実なカント解釈とはおよそいえないだろうが、ヴェブレンがカントを題材にして、知識の性質や人間本性の性格について論じた、ヴェブレンの哲学的見解の表明として貴重な論考である。ここに示された人間本性についての記述をもとに、本稿ではヴェブレンの後の人間本性論とのつながりを検討していきたい。

2. ヴェブレンの人間本性論における人間の認識能力

2-1 カント研究に現れているヴェブレンの人間本性論

「カントの判断力批判」の直接的な主題とはいえないかもしれないが、そのなかでヴェブレンが示した彼の人間本性についての見解を抽出すると、次のような内容が導き出せるだろう。

一つ目は、カントの認識論を大枠では受容し、人間の先験的な認識能力の存在を認めていることである。カントの批判哲学全体へのヴェブレンの見解について残されたものはないものの、『判断力批判』に対する書きぶりを見れば、細部の違いはあるにしても、人間がもつ認識能力の性質によって、世界の把握が可能となり、行動や生活が可能になるという見解は共有しているといえるだろう。

二つ目は、その先験的な認識能力の一つとして、仮説形成を行う推論能力の存在を認めていることである。これをヴェブレンは「適応の原理」と呼び、帰納的推論を導く人間の本性的な能力だとみなしている。この能力は、人間がもつ概念の論理的体系性に適応するように、外的世界が存在することを要求するものであり、その要求が満たされれば快感を、そうでなければ不快感をもたらすという感情の機制を通じて機能する。このように感情が試金石とし

てはたらくという機能の仕方はカントからの継承であるが、帰納的推論によって導かれた仮説が、より満足を引き起こすものへと、経験に照らして修正され続けるという、知識体系の進化の発想については、パースなどの影響が加わっているといえるだろう。

三つ目は、「適応の原理」が要求する仮説としての概念体系が、目的論的な性質をもつと考えることである。上述したように、ヴェブレンはカントに対して究極的に統合された形での目的論的な自然観まで要求されるわけではないと異論を唱えているが、そこにまでは至らない程度に目的論が含まれる形で、概念の論理的体系が形成されることを認めていると考えられる。これは一見不可解な態度とも感じられるだろうが、反省的判断力の論理的使用について論じている文脈のなかで、「適応の原理とは、知能の正常な作用のためには、事物は互いに体系的全体性を形作るように認識されざるをえず（事物は有機的全体をなすように調和的に作用すると認識されざるをえず）、精神は現実の知識をそれ自身の正常な作用に適合させようとするというものである」（ibid. p.189）と述べているところからそれが読み取れるであろう。特に、挿入句にある「事物は有機的全体をなすように調和的に作用すると認識されざるをえ」ないとする要求は、部分が全体の機能のために合目的的に存在しているはずだという目的論的な概念体系が形成される性質を指しているといえる。つまり、人間の精神が外的世界の把握のために、目的論的な読み込みをしてしまうという性質について、カントとヴェブレンの差はそれほど大きいものではなく、ヴェブレンは概ねカントの議論を認めながら、その目的論的な概念形成が人間の日常的な行動を手助けする以上に、究極的な自然総体の把握にまで到達するという着地点を批判したに過ぎないと整理できるだろう。

以上の3点が、ヴェブレンのカント研究から見えてくる彼の人間本性の見方であるが、これが後の経済学方法論や経済理論の展開において、どのように現れているのかが、本稿の関心である。結論的には、カント研究以来の人間本性論は、その後も維持され、表現を変えながらも、一貫した人間像として登場している。以下では、その内容について見ていきたい。

2-2 科学進化論に現れる人間像とのつながり

ヴェブレンは制度派経済学の創始者と呼ばれるが、それは本人が呼称したものではなく、ヴェブレン自身が自らの経済学の革新性を示すために使っていたのは、「進化論的経済学」という呼び名であった。これは、ダーウィンの進化論が科学方法論上の革新をなしたという理解のもと、当時の経済学が前ダーウィン主義的な方法論を脱していないのに対する、ダーウィン主義に基づいた新しい経済学を意味していた。このような経済学の革新プログラムは、本格的な経済学の著作が発表されるのに先駆けて、経済学方法論や科学方法論についての論文として続けて発表された。最初に進化論的経済学が提唱されたのが、「なぜ経済学は進化論的科学的ではないか」（1898）であり、「経済学の先入見」（1899-1900）では、進化論的経済学へと向かう趨勢が経済学史として描かれた。その後、科学全般を対象とした進化論的科学的

への展開が、「近代文明における科学の位置」(1906)と「科学の見地の進化」(1908)で論じられた。本稿では進化論的科学の議論には立ち入らないが、これらの著作には科学を作り上げる人間本性についての興味深い見解が示されているため、そこに注目して、それがカント研究以来の人間像とどのようにつながっているかを検討したい。主に取り上げるのは、「近代文明における科学の位置」である。

この論文では、近代科学に行き着く、知識体系の発展の歴史が、独特の知識論とともに展開されている。ヴェブレンは当時の心理学の知識に関する一致した見解が、「すべての学習は「実用的」特徴をもつ。知識とは不完全に目的を志向する不完全な活動である。すべての知識は「機能的」である。つまりそれは有用性をもつ」(Veblen (1906) p.5) というものだと述べる。「実用的」、「目的を志向」、「機能的」などと表現は多様であるが、ここで指摘されているのは、知識は主体にとって原則的に実用的な有用性をもつものだけということである⁸⁾。

ところで、知識を扱うのは人間の知性である。知性をもたない低次の生物の行動や、高次の生物でも本能的な行動は、刺激に対する自動的な反応に過ぎず、それが生存に役立つという有用性があったとしても、ここでいう知識のはたらきとはみなされない。「人間の次元では、知性(抑制的な複雑結合の選択的結果)が主体にとって好都合な結果を志向する理性的な行動の形で反応を返しうる」(ibid. p.6)。知性が主体にとっての有用性を追求し、そこで有用な知識が生み出されるのである。これをヴェブレンは「素朴なプラグマティズム」(ibid. p.6)と呼んでいる。ヴェブレンは知性のこの性質を認めながらも、「それがすべてではない」(ibid. p.6)として、独自の観点をつけ加える。

「抑制的な神経の複雑結合は、与えられた刺激に対する別の反応の連鎖を分離しうる。それは自動的行動の方向に向かわず、有用さの体系にはまらないものである。実用的にいえば、この周辺的な反応の連鎖は、意図されておらず不適切である。(しかし)緊急時以外は、そのような無用の(idle)反応は副次的な現象として一般的に現れているように思われる。知性は、その要素として、抑制的選択の性質をもつという見方を信じるならば、そのような無用で不適切な反応の連鎖を、自動的反応に行動の理性的道筋の特徴を与えることによって排除されていた、知性の要素のさらなるふるまいを説明するものとみなさなくてはならないだろう。そこで、実用的な注意力と関連した、多かれ少なかれ不適切な注意力、すなわち無用の好奇心(idle curiosity)が見出される。」(ibid. p.6)

難解な行論であるが、ここでヴェブレンは知性について、実用的な意味で主体に有用な行動を生み出すものだけではないはたらきがあることを指摘している。人間の行動が有用性に向かうだけなら、それは刺激への自動的な反応に過ぎず、低次の生物と変わらない。むしろ、与えられた刺激に対して、実用的でない反応をもなしうるような複雑な神経系の作用が知性

なのである。このことは、人間が実用的観点からは無用で不適切な行動も採りうることを意味するが、そのような行動は特異ではなく、一般的に見られる行動であるとして、「遊び」などを例にあげて、この見方の現実性を論じている。

こうして、ヴェブレンは知性によって、2種類の知識が生み出されると主張する。一方は実用的な知識であり、有用性を追求し日常生活に役立たせようとする、世俗的な知識である。もう一方は実用性とは無関係に好奇心によって形成される知識である。「この無用の好奇心の導きのもとでの事実の「解釈」は、観察された対象の「行動」の擬人的またはアニミスティックな形をとりうる。事実の解釈はドラマ的な形をとる」(ibid. p.7)と述べられるように、実用性を度外視した好奇心は、観察対象を擬人化し、それらが意思をもってふるまうかのように捉えたうえで、それらの関係性を一貫したドラマとして体系的に把握しようとするという。このタイプの知識は、こうして外的世界を包括的に理解する世界観を作り出すことになる。古代からの神話や伝説は、まさにこれに当たる。人類の知性史において、ヴェブレンはこうした2種類の知識が影響を及ぼし合いながらも、相対的に独立して、常に併存してきたとみる。

ヴェブレンの知性史の解釈を簡単に追うと、まず原始未開社会では二つの知識がまったく独立しており、日常生活に関わる知識と神話とが併存していたとされる。つづく野蛮時代には、実用的な知識のなかに、主従関係に基づいた階級社会における処世術が含まれるようになっていき、それに影響を受けて、好奇心による知識体系も位階制や権威の観念に彩られていく。神の概念は、かつては先祖であったが、いまや宗主として捉えられるようになる。自然法は神が定めたルールとして理解される。さらに時代が近代へと進み、近代産業が中心となった社会においては、産業の生産性を高めるような知識が、実用的な知識を形成するようになる。それは因果関係の法則で事物を捉えるということである。これに好奇心による知識体系も影響を受ける。この段階ではまだ擬人的な対象の捉え方は残るものの、現象の一連のドラマは職人の技量の観点で考察されるようになる。神は宗主から創造主へと意味を変え、自然法は、自然の設計図のようなものとなる。ここにきて、「因果関係の法則が、弁証的一貫性や真の伝統と比較して、最優先の位置を与えられた」(ibid. p.14)とされる。近代技術がさらに発展して、機械過程が生産を支配するようになると、これらの知識はさらに変化する。好奇心による知識体系からは、職人的な視点から因果関係を捉えるという人格的な要素がさらに抜け落ちて、非人格的な因果関係の連続として、外界を体系的に捉えるようになっていく。これが近代科学である。

この近代科学の捉え方は非常に独特のものだといえるが、特に注目すべき議論は、近代科学が神話や宗教と地続きの知識体系であり、いずれも好奇心によって生み出されたものだという点であろう。いわゆる自然の認識の進歩として近代科学を評価するのではなく、置かれた環境に応じて人間の知性が作り出す様々な知識体系のうち、近代以降の産業や社会状況

に適合した知識体系が近代科学であるに過ぎないという評価が下されているのである。

また、実用的な知識を、体系的な世界観をなす知識とは独立したものと認めている点も大きな特徴である。この知識は目立たず、大きな変化もしなかったとしながらも、日常生活を支えてきた知識として重要性を与えていることに、ヴェブレンの知性や知識に対する独特の見解が反映されているといえるだろう。

ヴェブレンの科学進化論からは、以上のような人間の知性論が見て取れる。これが最初期のカント研究で示された人間本性論とどのようにつながっているかを確認しよう。前節で述べたように、ヴェブレンはカント研究において、カント同様に先験的な認識能力を認め、その一つとして仮説形成を行う推論能力があることを認め、そこで形成される仮説は目的論的な性格をもつことを認めていた。科学進化論において、ヴェブレンが知性の性質として述べていることは、その認識能力の理解の延長上にあるはずであるが、知識の2分類の議論がそれとどう整合するのが問題となる。ヴェブレンが適応の原理と呼んだ認識能力はこの2種類の知識とどのように対応するといえるだろうか。

カント研究の段階では、適応の原理がもたらす知識がどのようなスケールのものかはあまり検討されていなかった。しかし、カントの目的論的判断力の性質を批判した視角が、究極的な目的論的知識体系に行き着くことの否定だったことを鑑みれば、ヴェブレンが適応の原理によって単一の包括的な知識体系が導かれるとは考えていなかったことは明白であろう。適応の原理は、そのような大きなスケールではなく、日常の身近な領域で事物の成り行きを予測するための知識を作り出す能力だというのがヴェブレンの主張であった。ここからは、適応の原理が、実用的な世俗の知識の形成能力とつながっていることが見て取れる。帰納的推論によって、暫定的だが客観的な知識が得られることで、行動や生活が可能になるのであって、これによって得られる知識以外に実用的な知識は存在しないとヴェブレンは述べている (Veblen (1884) p.193)。実用的な知識への視点は、このときから示されていたといえる。

とはいえ、これは適応の原理の性格の一面に過ぎない。適応の原理が、スケールはともかくとして、どのように仮説形成をして、知識を生み出していくのかを振り返ると、そこに目的論が入り込むという特徴をヴェブレンは認めていた。つまり、人間の仮説形成能力は、目的論的な仮説を形成する不可避的な傾向があるということである。ヴェブレンは適応の原理を説明する際、そのアприオリな知性の原理は「事物を知的秩序に還元することに他ならず、それはつまり、事物が悟性の法則にしたがって作られたかのように考えること、事物が知的原因によって作られたかのように考えること」(ibid. p.180) だと述べている。ここは、カントの反省的判断力の説明を繰り返しているだけにも見えるが、事物が「知的原因によって作られた」かのように考えるとの記述は、カントを超えて、人間の認識能力が擬人論やアニミズムに向かいやすいという性格を強調しているように思われる。そして、そのような性格

を、科学進化論においてヴェブレンは好奇心の作用として論じたのである。好奇心は、事物を一貫したドラマとして体系化しようとする人間の性質だとされている。それは現象間の関連を、意図や目的によって説明することであり、それが神話や伝説、さらには宗教となって包括的な世界観が構築されることとなる。これは、ヴェブレンが実用性を度外視した体系的知識としてあげた、もう一つの知識形態に他ならない。

これは一見、ヴェブレンのカント批判の内容と矛盾しているようにも見える。ヴェブレンはカントの目的論的判断力が、究極的な目的論的世界観をもたらすとしたことを批判していたからである。好奇心がなすことは、まさに目的論的世界観を構築することとも解釈できるため、ヴェブレンは結局カントを批判しつつもすべて受け入れていたようにも見えるかもしれない。しかし、科学進化論でのヴェブレンの議論は、カントとの決定的な違いとして、好奇心が形成する知識が、時代とともに変化するという内容を含んでいる。カントは静態的な議論の中で、究極的には唯一の形としての目的論的世界観を提示していたといえる⁹⁾が、ヴェブレンは動態的な議論をし、世界の包括的な知識体系が変化していくことを強調した。そして、擬人論やアニミズムといった強い目的論の要素は、時代とともに薄れていくとし、近代科学にいたっては、その要素から脱却した知識体系となっているとされている。つまり、ヴェブレンは、目的論的世界観には様々な形がありうるばかりか、目的論的要素を含まない世界観も可能であるとしている点で、やはりカントとは一線を画しているといえる¹⁰⁾。

いずれにしても、好奇心による知識体系は、カント研究で提示された適応の原理によって作り出されるもう一つの知識であることは確かであろう。そうすると、結局のところ、科学進化論で提示された2種類の知識は、いずれも適応の原理の産物ということになる。適応の原理は帰納的推論によって仮説形成をする能力であるが、それは何よりもまず知識を論理的に筋の通ったものにするを求める性質をもつ。それが大前提であるが、そこで形成される知識のタイプは一つではない。身近な現象について、どのようにすれば実用的に役立てられるかを論理的に導く知識もあれば、自然や社会の全容を統一的な体系的知識として論理的に構築する知識もある。後者は、適応の原理に備わる性質として、目的論的な知識を形成しがちであるが、それしか生み出さないわけではない。目的論的な一貫性よりも、論理的な一貫性の方が重要であり、目的論の強さは様々であるが、それぞれ論理的一貫性をもった数々の知識体系が、歴史上作られてきたのである。そして、これらの知識はいずれも仮説としてのみ存在できるのであり、日々の経験がその仮説の妥当性を検証し、現実の説明力が乏しい仮説が排除される形で、知識は変化していく。この変化の速度は知識のタイプによって異なるだろう。実用的な知識は実用性に欠ければ速やかに変化すると思われるが、目的論的な世界観はそう簡単には変わらなそうである。それに対して、目的論が弱まった近代科学は、因果関係の経験的実証を受けて、比較的速く変化するだろう。このような差はありつつも、いずれの知識も、適応の原理によって生み出された仮説としての知識として、人間の全体の知

カント研究に基礎づけられたヴェブレンの人間本性論

識の一部をなしており、これによって、様々なスケールにおいて、人間は世界と能動的に関われるようになるのである。ヴェブレンが2種類に区別して論じた知識は、このように、大きな意味では適応の原理が生み出した知識として、カント研究以来の知識論を延長し、豊富化させたものといえるだろう。

2-3 『製作本能論』に現れる人間像とのつながり

上述のように、ヴェブレンの科学進化論においては、人間の認識能力としての本性に基盤をおいて議論が展開されたが、人間本性を議論の基盤とすることは経済理論など他のテーマを論じるに当たっても同様であった。なかでも、経済理論において重要な役割を果たすのは、製作本能 (instinct of workmanship) と呼ばれる人間本性である。この言葉は、初期の論文「製作本能と労働の煩わしさ」(1898)で初めて登場し、主著『有閑階級の理論』(1899)で多用され、後に『製作本能論』(1914)という著作で、主題として扱われるほど、ヴェブレンが重視した概念であった。この本能の内容は、「有用性や効率性を高く評価し、不毛性、浪費、つまり無能さを低く評価する感覚」(Veblen (1899) p. 15, 26 頁)と説明されるものである。ヴェブレンは、人間が何らかの目的を追求する根源には本能があるとして、いくつもの本能の存在を指摘しているが、そのうちの 하나가、効率性を人間に追求させる製作本能であり、これが長期的には人間社会の生産性の向上を導いてきたと考える。

ただし、この性質について考察を深めた『製作本能論』において、製作本能の機能の仕方はより複雑なものとして捉えられるようになっていく。

「製作本能の機能的内容は、その目的がどんなものであろうとも、とにかく生活の目的に対して役立つことなのだが、実は、製作本能が助ける目的は、概して、他の様々な本能的性癖によって決定され価値づけられるのである。それゆえ、製作本能は、ある意味では、その他のすべての本能に対して補助的なものであって、なんらかの将来の目的よりは、むしろ生活の手段、方法に関係づけられるべきものと言え得るかもしれない。」¹¹⁾

(Veblen (1914) p. 31, 26 頁)

ここで述べられているように、製作本能は補助的な本能とされ、単独で目的を指示するようにははたらかないとされる。他の本能が示す目的とは、例えば、親性性向であれば、次世代や共同体の福利を棄損しないようにするということであり、略奪の本能であれば、私的利益を追求することである。これらの本能が示す目的を、より効率よく達成するための手段を追求するのが製作本能の機能であるとされるのである。

ここからは、製作本能が単純に人間社会の豊かさを向上させることには結びつかないことが分かる。それは製作本能が他のどの本能と一緒に発揮されるか次第であり、親性性向と結

びつけば公益が促進されるだろうし、略奪的本能と結びつけば利己的な行動が促され、社会は荒廃するかもしれない。これらの正反対の性格の本能は、どちらも人間に備わっている自然な本性であって、このような多様な本能をもち合わせている人間という種そのものは、人類の文明史のレベルでは不変であるとヴェブレンは考えている。それゆえどちらになる可能性も等しくあるのだが、こうした多様な本能のうちどの本能が強くなるのかを決めるのが制度であるとして、制度理論へとつながっていくことになる。

こうして、『製作本能論』では、製作本能が補助する本能の変化が制度の変化によって引き起こされてきた大局的な人類史の展開が描かれる。まず、原始未開時代には、製作本能は親性性向と結びついていたが、後の野蛮時代には略奪的本能と結びつき、生産技術の効率性は長らく押しとどめられた。その後、近代に入ると、平和的な所有権の確立と手工業の勃興により、製作本能は金銭的利益の追求という形態の略奪的本能と結びつく形で、生産力を向上させていった。これがヴェブレンの独特な本能論から的人类史の解釈である。

本稿ではこの詳細には立ち入らないが、ヴェブレンのこの議論の根底をなしている、製作本能の発現の複雑さ、すなわち、製作本能は効率性を求める人間本性だとされながらも、実際のところ、人類史上ではほとんどの時期において効率的な生産技術や組織をもたらしてこなかったというねじれについて、追究してみたい。というのは、ここに、人間の認識能力についてのヴェブレンの人間観が垣間見え、初期のカント研究とのつながりを見出せると考えるからである。

『製作本能論』第2章は「原始的技術における本能の汚染」というタイトルであり、本能がストレートに目的を達成するにはたらくことはなく、習慣によって様々な形で妨げられることを本能の「汚染」として論じている。この議論のなかで、注目すべき概念が、製作本能の「自己汚染」と呼ばれるものである。「製作者気質につきまとう最も妨害的な攪乱は、製作者感覚それ自身の自己汚染と名付けてもよいものである」(Veblen (1914) p.52, 43頁)とあるように、製作本能については、習慣や制度、他の本能の干渉といった外からの「汚染」以上に、「自己汚染」というメカニズムが本来の目的を妨害すると論じられる。その内容は、

「擬人説 (anthropomorphism)、あるいは、そのより古風な形態にすぎない精霊信仰 (animism) として論じられてきたものである。擬人説的観念の本質的特色は、…多かれ少なかれ完全に人間の行為様式に擬せられた行為が、外部の客体に帰属されてしまうことである。その外部の客体は、観察できる事実、架空の想像力の創作物、そのいずれであっても差支えない。こういう擬人説というものは、通常、製作技量の観点で、…特に、高度に神話化された観点で解釈することを意味している。」(Ibid. p. 52, 44頁)

ここで述べられているのは、外的客体の認識の仕方であって、そこに、擬人説やアニミズムが入り込むことの不可避性が指摘されている。外的な事物を、人間の行動の類比として解釈する思考習慣が形成され、それによって、ありのままの事実の解釈が妨げられるという。この思考習慣は、人間が発意と努力によって創作するという経験が、あらゆる創作物にはその製作者の意思や目的が関わっているとの思考をもたらし、その思考パターン of 習慣的な使用によって確固たるものになることで形成される。こうして、「観察された諸現象は、本能と習慣によって、この（目的論的）見地から理解され、組織化を通じて、このような製作者らしい目的の本能的追求の観点で解釈される」（*Ibid.* p.54, 45 頁）のである。つまり、製作本能は、目的論的な世界の認識を形成する傾向にあり、その認識が思考習慣として強固なものになることで、製作本能の本来の目的であった効率性の追求を阻害するような「自己汚染」をもたらすとされるのである。

ここで形成される目的論的な知識の性格については、以前の議論との比較で注意が必要である。ヴェブレンは自己汚染の説明にすぐ続けて、「現代の心理学的用語によれば、人間の知識は「実用的」性格のものなのである」（*Ibid.* p.54, 45 頁）と述べている。これは科学進化論で提示された2種類の知識に当てはめれば、日常生活のための実用的な知識の方を指しているといえるだろう。つまり、以前は好奇心が形成する世界観としての知識体系にアニミズムや目的論が入り込むことが強調されていたが、ここでは、日常的な実用的知識の方にもそれが入り込むことが論じられている。人間が作り出す知識は総じて目的論に向かう傾向があり、それが製作本能に根源をもつという議論へと拡大しているといえる。

『製作本能論』で描かれる知性史の大筋は、事実を捉える知識として、事物のアニミスティックな解釈を与える知識と、事実即知識という2種類があり、前者の人格的で目的論的な知識が、後者の非人格的で非目的論的な知識体系へと置き換わっていくというものである。つまり、製作本能は人類史の初期段階で最も「汚染」されており、それが近代になって緩和されていくという流れである。しかし、なぜ初期の人類はアニミスティックな知識体系にとどまり、製作本能が「汚染」された状態にとどまったのだろうか。

これについて、ヴェブレンは2種類の知識が本質的には矛盾するはずだと述べながらも、原始未開時代の低度の産業技術の状況下ではそれらはいずれも客観的知識として実用的に通用していたと論じる。例えば、陶工が陶器を作る際に、道具や原料に精神が宿っているかのような解釈によって、物理的な生産工程が確立するというようにである。もちろんこれは技術的効率から見れば非効率であろうが、このような無生物の対象を扱うものに対して、農耕や牧畜などの生物を対象とする場合には、その程度は弱まる。対象が目的論的に活動する存在と解釈してはたらきかけることは、それほど効率性を損ねず、このような産業においては着実な進歩が重ねられてきた。ヴェブレンは、石器時代における道具の技術的進歩の緩慢さと、動植物の利用の進歩とを比較し、「貝塚の住民は、耕作と飼育の技術の獲得に比べ、有

用な力学的手段の利用を学ぶ能力が劣っていたように思われる」(Ibid. p.67, 56 頁)と述べるが、これは、知識がアニミスティックな体系に偏っていたなかで、生物を対象にするものについては、「この間接的で、精霊信仰的、魔術的な接近方法によって、耕作と家畜飼育の即事実的な必要条件は…満たされることが出来る」(Ibid. p.79, 64 頁)のために、生じた差であると論じている。他方、無生物を扱うに当たっては、擬人説は妨害的であり、「目的論的解釈にむかう性癖は、原始的な不可欠の工芸における技術的進歩を阻む、ほとんど決定的なものであった」(Ibid. p.81, 66 頁)と指摘されるのである。

しかし、いずれにしても、初期段階の人類にとっては、アニミスティックな知識体系が、対象と関わるときの主要な知識であり、実用的に用いられていたということである。それは近代科学の知識体系とは異なり、無生物を効率的に扱うには不適當であったが、農耕や牧畜を基盤とした生活においては、十分に実用に適うものであったために、持続したといえるだろう。そうすると、産業の基盤とも適合的な知識体系がこの状態にとどまることは特に不思議ではなく、むしろなぜこの知識体系が変化するのかということの方が、問われるべき問題となってくる。ここで、その役割を果たすのが、以前にも本能の一つとして登場した好奇心である。

ところで、先にも述べたように、『製作本能論』においてヴェブレンは、科学進化論で提示された知識の二分法を強調せず、日常的な知識から一貫した世界観としての知識までを連続的なものと捉え直していると思われる。両者は知識体系としてのスケールは異なるが、いずれも製作本能と認識能力が作り出した目的論を含みがちな知識であり、一面での実用性と他面での非効率性を、同様に兼ね備えているものである。科学進化論においては、一貫した世界観は好奇心によってもたらされる一方で、日常的な知識はそうではないとして、その起源にも区別がなされていたが、いまやそうした区別はなされていない。

それにともなって、『製作本能論』では、かつてとは違った意義をもつものとして、好奇心は登場する。「より重大な関心が彼らの注意を奪っていない時に、人間が多かれ少なかれしつこく、諸事物を知ろうと望む無用の好奇心」(Ibid. p.85, 69 頁)というのが、ここでの説明であり、以前に述べられていた、一貫した知識を追求する性質というものと、一見変わらない記述に見える。しかし、製作本能をもっている時点で人間は日常的な知識から神話的な知識までを構築できるとされているのであるから、好奇心が一貫した知識体系を導くといってもその意義は小さいことになる。そのような役割に代わって、ここで強調されるのは、好奇心が「無用の」興味関心から、既存の知識体系とは別の知識を求めるという性格である。「本能的な好奇心は、技術的洞察における成果を有効に促進するために時々やってきては、利用することができる物質的情報をもたらしたり、また、製作本能が頼りとしている習慣的な知識体系をしつこく妨害したりする」(Ibid. pp.87-88, 70-71 頁)のである。既存の知識体系が習慣的に強固に保持されていると、製作本能がなしうるのはその範囲で実用的な効率性

を追求することだけである。この過程に知識の変化のきっかけは乏しい。しかし、ここに好奇心が加わることで、人間は新しい知識の創発に開かれることになるのである。好奇心は非目的論的に様々な思考をめぐらせ、多様な知識を生み出す。その多くは既存の知識体系の下で、異質なものとして排除され圧殺されていくだろうが、偶然的に普及すれば、既存の知識体系を変化させていくことになる。いまや好奇心は神話を形成する役割だけでなく、それを掘り崩す役割をも与えられているのである。このように、ヴェブレンは知識の変化の原動力として、好奇心を評価し直しているといえるだろう。

以上のような、『製作本能論』における知識論が、カント研究における人間の認識能力の理解とどのように結びついているかを確認しよう。この著作の特徴は、人間が目的論的な知識体系をもつことを、製作本能の「汚染」として、それが人間にとって不純なものであるかのような表現をしていることである。しかし、その内容をふまれば、それは人間にとってまったく非本質的なものではなく、確かに実用性の面では非効率な知識だという側面はありつつも、人間が不可避的に生み出す知識体系だと認められているといえる。つまり、ヴェブレンは、事物の目的論的な解釈を行う人間の認識能力を大前提として、ここでの議論を展開していたわけである。この人間像は、カント研究で示された、反省的判断力によって目的論的な現象の解釈をする人間像そのものだとはいえる。また、知識体系が究極的な目的論に収束すると考えるのではなく、変化し続けるものと想定するところも、カント批判を通じて示した考え方を引き継いでいる。確かに、知識体系の変遷やその原動力についての考え方は、科学進化論で論じられたことから変化があり、特に好奇心の役割の評価は大きく変わっているものの、大局的な人間の認識能力に対する見方は、カント研究のときから一貫して引き継がれているといえるだろう。

おわりに

以上で見てきたように、ヴェブレンはカント研究を通じて、人間は反省的判断力によって目的論的に現象の解釈をする傾向にあるという認識能力についての理解を確立させ、その人間像を後の著作で繰り返し示している。それはかなりの程度カントを受け継いだものといえるが、人間がもつ知識が、日常的な身の回りのものを対象にするレベルと、世界観をなす知識体系のレベルとで性質を分け、それらの変化を描こうとした点で、独自の見解を示したといえるだろう。

このヴェブレンの認識論は、知識体系がどのように生み出されるかを基礎づける理論であるが、知識体系とは思考習慣であり一種の制度である。いうまでもなく、それは制度理論を構築したヴェブレンにとって、要となる概念である。つまり、ヴェブレンの制度理論は、本能が与える行動の原動力と結びついているだけでなく、認識能力が作り出す知識体系とも結

びつく形で、複層的に人間本性論を基礎にしているといえる。そして、その認識能力を論じたものとして、ヴェブレンのカント研究は、ヴェブレンの理論体系全体にとっての重要な土台となっているといえるだろう。

注

- 1) ヴェブレンの本能論がどのように評価されてきたかについては、杭田(2005)に整理されている。本能論は体系の中心であるがこれ自体は倫理的価値基準であるとする立場(中山)、本能論と習慣の理論には矛盾があるとする立場(ウォーカー)、本能論はヴェブレンの制度論にとって不要であるとする立場(ラザフォード)など、積極的には意義を認めない評価が多いという。
- 2) ヴェブレンの博士論文は「因果応報説の倫理的基礎」というタイトルであったが、論文は早期に行方不明になっており、内容は明らかになっていない。Dorfman(1934)では、伝聞に基づき、スペンサーとカントを徹底的に検討した内容であったと述べられている。
- 3) 19世紀後半のアメリカにおいて主流であった常識哲学は、絶対的真理を人間は「常識」によって直観的に認識できるとするものであり、ヒュームの懐疑主義などから宗教的な信仰の意義を守ろうとする、保守的な思想として権威をもっていたという。そのような時代状況のなかで、絶対的真理たる「物自体」は人間が認識しえず、先験的な認識能力を通じて経験したことで、それに近づきうるにすぎないとするカント哲学は、破壊的な思想として異端視されていた。ヴェブレンのカント研究は、何よりもまずこの常識哲学への対抗にあったと中山は論じている。「懐疑主義的傾向の強いヴェブレンは、当時、アメリカの哲学思想を支配していた「常識」哲学およびそれに基礎づけられた神学思想に対して、異端視されていたカント哲学に関する研究を通じて、当時の宗教的思想傾向を排撃せんとしたのであった。」(中山(1974)75頁)
- 4) ヴェブレンが提示した進化論の方法とは、絶対的真理として確立している法則性からの演繹によって現象を説明しようとする目的論的な方法とは異なり、現象間の累積的因果関係を研究対象として非目的論的に世界の法則性を導こうとする方法を意味する。それはダーウィン主義という言葉で表されるが、同じくダーウィン主義の影響を受けたスペンサー主義とは大きく異なる。中山(1974)が述べるように、スペンサー主義は進化論を神学的な目的論と合流させ、進化には究極的な到達点があるものとした理論となって当時のアメリカで普及したが、ヴェブレンはそこから神学的色彩を清算して、ダーウィン主義を進化論的方法論の模範としたのである。
- 5) 「実践理性は、理論理性を支配しなくてはならなかった(実践理性の優位)。道徳は、その目的を、自然において実現しなくてはならなかった。つまり、道徳の世界における自由の法則は、自然界の因果関係のなかで、みずからをあらわさなくてはならなかった。」(小牧(1967)188頁)
- 6) ヴェブレンは先に引用したカントの判断力の定義の文章を引用し、規定的判断力の部分に「演繹的推論」、反省的判断力の部分に「帰納的推論」と挿入している。(Veblen(1884) pp.177-178)
- 7) 帰納的推論を仮説形成能力とし、その妥当性を経験的検証によって確認することで、実践的な知識が得られるとするヴェブレンの議論は、アメリカの哲学者パース(Charles Peirce)が提唱したプラグマティズムの科学方法論に類似していることが、先行研究で指摘されている。パ

ースが示した信念の確立の過程は、アブダクション、演繹、帰納の3段階を経る。アブダクションは特殊な現象から普遍的法則を推測し、仮説を形成する段階である。演繹は仮説を一般化し、別の特殊な場合にどんな結果が起こるかを論理的に推論し、帰納はその仮説が経験と符合するかを確認する。帰納によって反証がなされなければその仮説が真理であるという信念が強まり、反証がなされれば、仮説が修正されたり、別の仮説が信念を獲得したりする。仮説はどこまでいっても絶対的真理ではなく蓋然的な真理にとどまるが、信念に支えられている仮説によって実践的な知識が構築されていると考えるのが、プラグマティズムの科学観である。ヴェブレンの議論は、帰納的推論をアブダクションに置き換えれば、全体としてこの科学方法論に沿っているといえる。このような点に注目して、Dyer (1986) や Griffin (1998) などは、ヴェブレンのカント研究が、パースの影響を受けたヴェブレンの科学観が示されたものと論じている。一方で、石田 (2014) などは、ヴェブレンがパースについて言及していないことなどから、その強い影響については懐疑的である。

- 8) ここでの「実用的」の原語は pragmatic であるが、日常用語としての実用性を指す意味として使われており、哲学のプラグマティズムとは直接の関係はもたない。
- 9) カントの3批判体系は、人間の普遍的な認識能力の機能や性質を論じるという性格上、歴史的に変化する要素が排除されているのは、理論上必然的といえるが、その超歴史的に普遍的な世界観として、目的論的世界観を指定することに対してヴェブレンは批判を投げかけたといえることができる。
- 10) もっとも、ヴェブレンがカント研究において、適応の原理が「知的原因」による説明をも要求すると断言したときの立場からは、微妙な修正をしていると認めざるをえないかもしれない。その時点の議論では、カント同様に、無時間的に、あるいは人間の認識能力の不変性を前提に、適応の原理が、ある範囲で目的論な知識体系を構築することが指摘されていた。しかし、知性史という形で動態的な議論をするときに、適応の原理が要求する目的論の強さについての変化が議論に加わったと考えれば、カント研究を下敷きに、その認識を発展させたという評価は可能であろう。
- 11) 引用元の邦訳では workmanship が基本的に「職人技」と訳されているが、本稿では表記の統一のため「製作本能」や「製作者」などに改めている。その他も一部改訳している。

参考文献

- Dorfman, J. (1934) *Thorstein Veblen and His America*, Viking Press (八木甫訳 (1985) 『ヴェブレン—その人と時代』ホルト・サウンダーズ)
- Dyer, A. W. (1986) "Veblen on Scientific Creativity: The Influence of Charles S. Peirce", *Journal of Economic Issues*, Vol. 20 No. 1, pp. 21-41
- Griffin, R. (1998) "What Veblen Owed to Peirce—The Social Theory of Logic", *Journal of Economic Issues*, Vol. 32 No. 3, pp. 733-757
- Kant, I. (1790) *Kritik der Urteilskraft* (篠田英雄訳 (1964) 『判断力批判 (上) (下)』岩波文庫)
- Liebhafsky, E. E. (1993) "The Influence of Charles Sanders Peirce on Institutional Economics", *Journal of Economic Issues*, Vol. 27 No. 3, pp. 741-754
- Peirce, C. S. (1877) "The Fixation of Belief" in Hartshorne C. and Weiss P. ed. (1960) *Collected*

- Papers of Charles Sanders Peirce*, Vol. 1-4, Harvard University Press (「探求の方法」上山春平訳 (1968) 『世界の名著』中央公論社 第 48 巻 53-75 頁)
- Veblen, T. B. (1884) “Kant’s Critique of Judgment” in Veblen, T., and Ardroni, L. ed., (1934) *Essays in Our Changing Order*, New York, Viking Press, pp. 175-193
- Veblen, T. B. (1898a) “Why is Economics not an Evolutionary Science?” in Veblen, T. (1919) *The Place of Science in Modern Civilisation and Other Essays*, New York, B. W. Huebsch, pp. 56-81
- Veblen, T. B. (1898b) “The Instinct of Workmanship and the Irksomeness of Labor” in Veblen, T., and Ardroni, L. eds. (1934) *Essays in Our Changing Order*, New York, Viking Press, pp. 78-96
- Veblen, T. B. (1899) *The Theory of the Leisure Class: An Economic Study in the Evolution of Institutions*, New York, Macmillan (高哲男訳 (2015) 『有閑階級の理論』講談社学術文庫)
- Veblen, T. B. (1906) “The Place of Science in Modern Civilisation” in Veblen, T. (1919) *The Place of Science in Modern Civilisation and Other Essays*, New York, B. W. Huebsch, pp. 1-31
- Veblen, T. B. (1908) “The Evolution of the Scientific Point of View” in Veblen, T. (1919) *The Place of Science in Modern Civilisation and Other Essays*, New York, B. W. Huebsch, pp. 32-55
- Veblen, T. B. (1914) *The Instinct of Workmanship and the State of the Industrial Arts*, New York, Macmillan (松尾博訳 (1997) 『ヴェブレン 経済的文明論 一職人技本能と産業技術の発展一』ミネルヴァ書房)
- アルセニイ・グリガ (1977) 『カント—その生涯と思想』西牟田久雄, 浜田義文訳 (1983), 法政大学出版会
- 石田教子 (2014) 「若きヴェブレンのカント『判断力批判』研究—進化論的経済学のルーツをたどる—」『経済集志』日本大学経済学部, 第 84 巻第 2 号, 43-67 頁
- 稲上毅 (2013) 『ヴェブレンとその時代』新曜社
- 杭田俊之 (2005) 「ヴェブレン進化経済理論の構成と「観点」」『アルテスリベラレス』岩手大学人文社会科学部, 第 77 号, 13-35 頁
- 小牧治 (1967) 『カント—人と思想 (15)』清水書院
- 中山大 (1974) 『ヴェブレンの思想体系』ミネルヴァ書房
- 新井田智幸 (2006) 「ヴェブレンの制度論の構造—人間本性と制度, 制度進化—」『経済学研究』東京大学大学院経済学研究科, 第 49 号, 1-11 頁